

10th
Anniversary

隠岐ジオパークを活用して、隠岐の未来を考える

Oki Islands Geopark Management Bureau

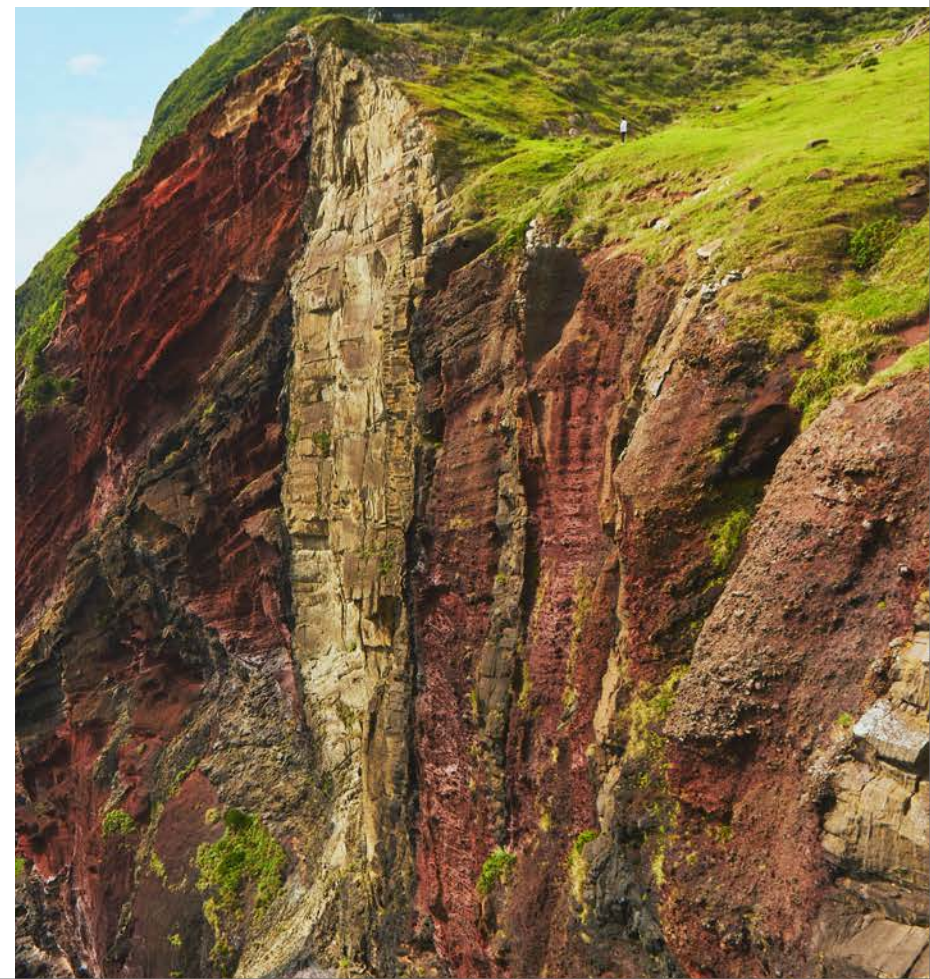
OKI
ISLANDS
GEOPARK

一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構

〒685-0013 島根県隠岐郡隠岐の島町中町目貫の四61番地



隠岐を語るもの。



地球が魅せる、一瞬の奇跡。



隠岐を語るもの。

隠岐には、数々の「絶景」がある。

それは、自然の作用によって生み出され、

長い年月をかけて島が守ってきた景色。

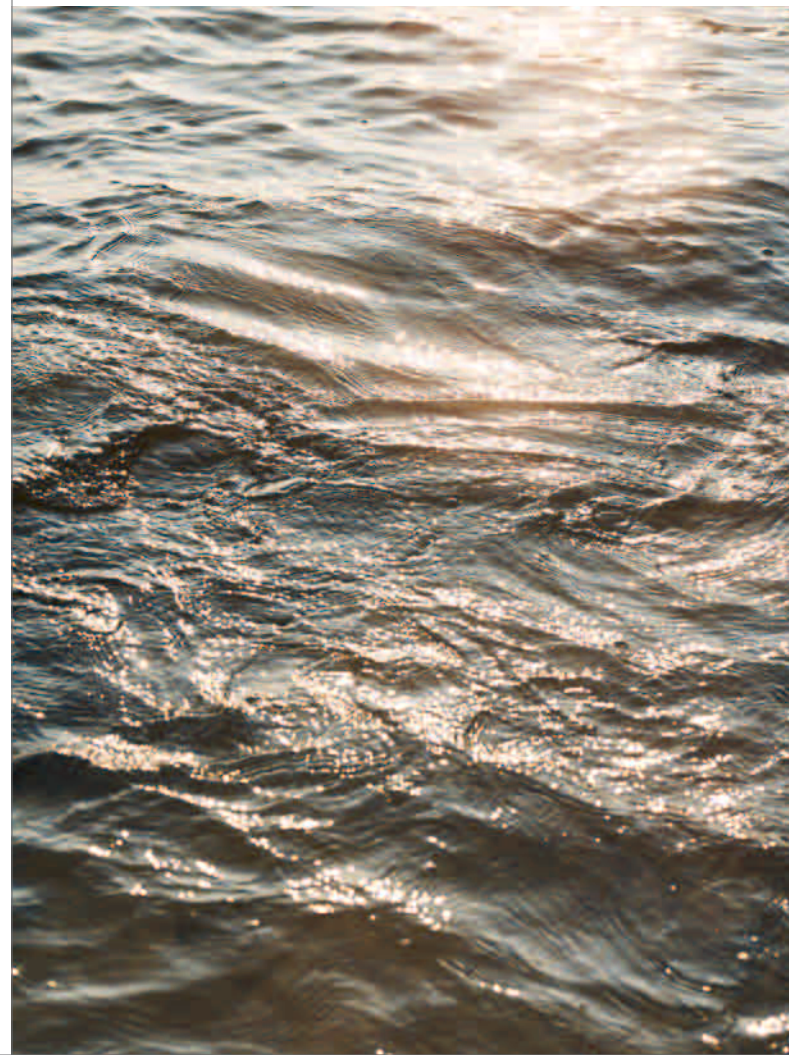
水や、風や、大地や光などの繊細なバランスで

刻々と表情を変え続ける、一瞬一瞬の奇跡。

隠岐の、そして地球の雄大な姿が、眼前にひらける。



隠岐を物語るもの。



となりに息づく、神々。



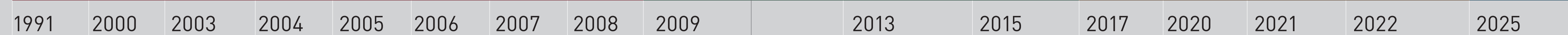
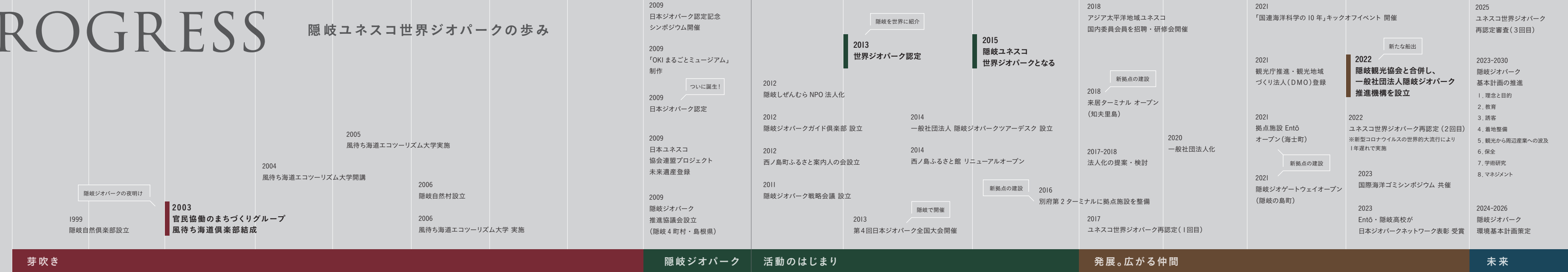
『古事記』にも登場する隠岐諸島。
名の知られた祭神から自然信仰まで、
古くから日本で信仰されてきた
八百よろずの神々が、今も大切にされている。
島のあちこちに点在する神社、
人々の手で受け継がれている神事。
普段の暮らしの中に、敬いと親しみの念がある。

PROGRESS

隠岐ユネスコ世界ジオパーク

世界と日本の動き

隠岐ユネスコ世界ジオパークの歩み



世界ジオパーク認定地域 9 カ国 21 地域

日本ジオパーク認定地域 7 地域

32 地域

46 地域

48 カ国 195 地域



風待ち海道倶楽部立ち上げメンバー：左から野邊一寛、毛利彰、吉岡陽子、八幡浩二、斎藤一志

玉若酢命神社 たまわかすみことしんじや

島後 | 隠岐の島町

平安時代に編纂された日本最古の全国神社一覧『延喜式神名帳』で式内社に列せられる格式高い古社。境内には樹齢千数百年の巨木「八百杉」が30種あまりの植物を樹上に養いながら生育しています。

2003

2008

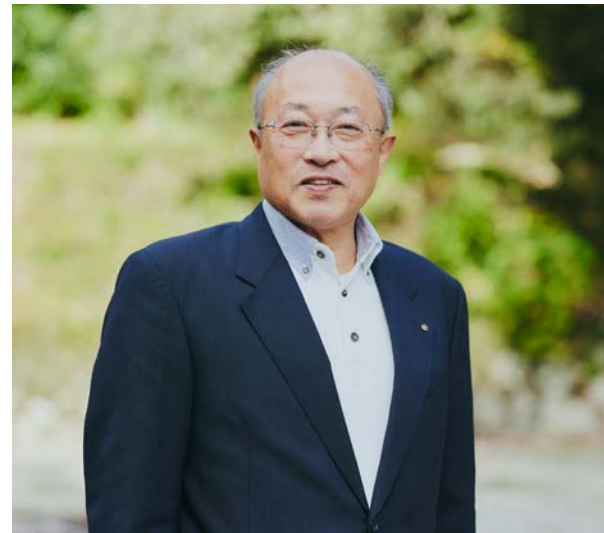
DAWNING

芽吹き

2003年、島後である動きが起こりました。
隠岐の未来のためにできることはないかと、
隠岐の魅力をよく知る人たちが集まったのです。
のちの隠岐ジオパークの活動へとつながる
芽吹きのひとつです。
この芽がジオパークを目指す活動へとつながり、
2009年、隠岐は日本ジオパークに認定されました。

- 1999 隠岐自然倶楽部 設立
- 2003 風待ち海道エコツーリズム大学 結成
- 2004 風待ち海道エコツーリズム大学 開講
- 2005 風待ち海道エコツーリズム大学 実施
- 2006 風待ち海道エコツーリズム大学 実施
- 2006 隠岐自然村設立

1999年に隠岐（島前・島後）の自然愛好家によって隠岐自然倶楽部が設立され、環境保護活動や隠岐の生物に関する調査活動が始まった。この活動を引き継ぐように、島後では「官民協働」の地域づくりを行うグループ「風待ち海道倶楽部」を2003年に結成。2004年にエコツーリズム大学を開始し、のちの隠岐ジオパーク構想の土台となる考え方が生まれた。それまでは、隠岐に上皇や天皇が配流されたという歴史的資源や、自然の造形美のみを題材に隠岐の魅力を表現していたが、それだけではなく自然環境や生態系、そこに育まれた文化も含め、隠岐が有する資源の独自性を見つめ直した。2006年には島前の海士町に隠岐自然村が設立され、自然環境教育や野生動物調査エコツーリズムによる地域振興が始められた。2007年からはジオパークによる地域おこしを目指すため、島前地域へも呼びかけ2009年に隠岐4島と島根県による隠岐ジオパーク推進協議会を発足。



毛利 彰（エコツーリズム大学講師 | 毛利酒店 店主）

観光客の減少。そして諦めムードに。

隠岐には、旧石器時代の上質な黒曜石の産出に始まり、中世以降は上皇や天皇など貴人の遠流の地、そして北前船の風待ち港として栄えた江戸時代まで、日本海交流の拠点として繁栄してきた歴史があります。それに加え、大山隠岐国立公園に指定された豊かな自然環境によって、観光地として賑わってきました。ところが、観光客のニーズの変化や離島という地理的条件などから観光客は年々減少し、島の経済を支えてきた公共事業費も削減され、商店街には空き店舗も目立つようになりました。沈みゆく島に危機感を覚え、それまでも様々なグループによって活性化の取り組みが行われてきましたが、横の連携がなかったために個別の取り組みにとどまり、成果が得られずに諦めムードが広がっていました。

行政と民間が、同じ目的のために力を合わせる。

こうした状況のなか、隠岐の未来のため、地域活性化の活動をより効果的に行うには、行政と民間が同じ目的のために力を合わせ「官民協働」の地域づくりを行うことが欠かせないと考え、官民一体のまちづくり団体「風待ち海道倶楽部」を設立しました。

当初は、商店街の活性化と新たな観光資源の開発のために、とにかく人を呼びたいと、朝市や港を活用した結婚式、歴史講座にライブなど、イベントを中心とした取り組みを行い、多くの人に参加していただきました。



吉岡陽子（吉岡家具 代表 | 風待ち海道倶楽部 代表）

隠岐の本当の魅力を島民が学び直す。

活動を続けてしばらくすると、「歴史や絶景以外にも、隠岐の魅力がまだまだある」「島に住んでいる自分たちも本当の隠岐についてまだ知らない」「隠岐について気軽に勉強できる場所が作れないだろうか」という声がメンバーから上がりました。さらに、島の活性化を行うためには、まず住民が隠岐の素晴らしさを知ることが大事だと考え、隠岐を再認識するための講座「風待ち海道エコツーリズム大学」を2004年に開催しました。2005年、2006年も実施し、歴史学科、自然環境学科陸上コース・海洋コースの3講座を設け、その内容も多岐にわたり、誰もが楽しめる内容、アカデミックな内容で、これまでと違った角度からの学び直しを行いました。

沈みゆく島を元気にしたい

島の人間が、自分たちで運営する。

これまでは島外から著名な人を招いて講座を行っていましたが、そのような形では人任せとなり効果が得られない。また、本気になって自分たちで運営しないと継続できないといった意見が相次ぎ、本当の隠岐を知るために、運営も講師も島の住民で行うことにしました。一方で、固有種や希少種が不法採取されている現状に、貴重な自然を守るためにはひっそりと残すのが最善という意見も上がりましたが、やはり、住民が隠岐の自然環境の貴重性・重要性を認識することこそ不法採取撲滅につながると思えました。



野邊一寛（エコツーリズム大学企画・運営 | 一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 事務局長）



DAWNING

風待ち海道エコツーリズム大学

エコツーリズム大学の開催により、現在のジオパーク構想の土台となる考え方が生まれました。隠岐諸島の「大地の成り立ち」、北方系と南方系の植物が共存する「独自の生態系」、古代から続く「人の営み」の3要素が確立され、それはのちの世界ジオパーク認定へとつながりました。

Vision

エコツーリズムによる、隠岐の地域振興・観光振興を目指す

Mission

1

新しい観光の形をつくる
(体験型観光)

2

雇用の機会をつくる
(有償ガイド)

3

地元のプライドを育む
(隠岐の価値認知)

Lecture contents

自然環境学科
海洋コース

海洋生物、対馬海流、日本海の特徴などについての学習

自然環境学科
陸上コース

植物、動物、昆虫、地質などについての学習

歴史学科コース

黒曜石～北前船までの隠岐の歴史、神社・仏閣、祭りについての学習

ジオパークを題材に町おこしをするというコンセプトのもと活動を続けていますが、認知度や人口減少、後継者不足などまだまだ課題は多いと感じています。中でも特に、ガイドの数と質の向上は欠かせないと思います。それには、隠岐ジオパークのガイドができます、ということだけでは足りず、例えば、地球史や日本列島の成り立ちといった、より広範囲な話題についても、日本中のジオパークガイドの間の共通知識として統一したものになくはならないですね。

ちゃんとそれをやれば、日本列島は特異な地質をしていて色々なものがあって、全部がジオパークでとても面白いから、国民がもっとジオパークに興味を持つようになると思います。



斎藤一志(エコツーリズム大学講師|旅館松浜 代表)

ガイドを増やし、
知識の統一が必要。

次世代に、どうつなげるか

自分たちだけじゃ無理。
協力してもらって、
隠岐を高めていく。
それしかない。



八幡浩二(エコツーリズム大学講師|八幡黒曜石店 店主|一般社団法人 隠岐ジオパークツアーデスク 代表理事)

島民が隠岐の素晴らしさに気づいて誇りに思うことがやっぱり大事で、隠岐の魅力をいかにして伝えるか、というところが重要です。だけど今は、自然環境が急激に変化して海の中も様変わりしている。科学的な分析機器がどんどん発達して、分子生物学も地学も天文学も、ものすごい勢いで刷新されています。そういう新しい技術も取り入れて隠岐の魅力を発掘するべきで、そうなるごとに迷った部分が紐解けていきます。しかしそれをするにはこの事務局だけでは無理でしょう。そこで、これまでの活動で築いたネットワークを通じてつながった専門家たちを交えながら、みんなに協力してもらって隠岐を高めていく。民間の力を借りて、隠岐の人も入れ、専門家も入れて、誰が何をどうするかをもう一度練り直す。そして、みんなの意見を入れた上で、次年度、これだけの予算をつけてこれをしようというように計画を推進機構が立てればいい。隠岐はまだこんなものじゃないんです。世界中に影響を与えるものをもっています。そうなれば、地元の子供達は当然隠岐を誇りに思いますよね。



島前エリアガイド：左から深谷治、福田貴之、松浦道仁、口村光房

摩天崖 まてんがい

島前 | 西ノ島町

西ノ島の北西に位置する海拔257mの大絶壁。冬季の北西からの季節風による荒波が激しく打ちつけ、山肌が削られて生まれました。周辺一帯の放牧地では、牛馬がのんびり草を食べています。

2009

2015

FORMING

ジオパーク活動のはじまり

隠岐諸島全体が日本ジオパークに認定され、それまでも各島でエコツアーや環境教育活動を行ってきた島前の人たちがメンバーに加わり、隠岐諸島全体でジオパーク活動を推進していくことになりました。新たな船出です。

2009年に日本ジオパークに、2013年に世界ジオパークに認定されました。そして2015年、世界ジオパークの事業はユネスコの正式事業になりました。



- 2009 隠岐ジオパーク推進協議会 設立
- 2009 日本ジオパーク 認定
- 2009 日本ジオパーク認定記念シンポジウム開催
- 2009 「OKIまるごとミュージアム」制作
- 2011 隠岐ジオパーク戦略会議 設立
- 2012 西ノ島町ふるさと案内人の会設立
- 2012 隠岐ジオパークガイド倶楽部 設立
- 2012 隠岐しぜんむらNPO法人化
- 2013 世界ジオパーク 認定
- 2013 第4回日本ジオパーク全国大会を隠岐で開催
- 2014 一般社団法人 隠岐ジオパークツアーデスク 設立
- 2014 拠点施設 西ノ島ふるさと館 リニューアルオープン
- 2015 ユネスコ世界ジオパークとなる

隠岐4町村が協働で行う、関東圏・関西圏でのPR手法の一つに風待ち海道エコツーリズム大学が採用され、東京大学、関西大学で出張講座を実施するなど、島後での活動が次第に隠岐諸島全体へと広がっていった。2009年の日本ジオパーク認定の前後には、西ノ島町、海士町、知夫村の島前地域も合流した隠岐全体としての活動にシフトしていく。しかし、ジオパークになったからといって急に観光客が増えるわけではなく、何かを仕掛け続けることが重要。そのため、隠岐の真の魅力が島内に発信することにとどまらず、島民の言葉で積極的に島外に情報発信していくこととし、世界ジオパーク認定を目指すと同時に、ジオパークガイドの養成・スキルアップ、調査・研究、保全・保護の活動を強化。



自らの言葉で
伝えること。

口村光房 (西ノ島ガイド | 西ノ島町立浦郷小学校 元校長 | 西ノ島町議会 元議員)

それまでの日本には、観光に来た時にわざわざ人を雇ってお金を払ってガイドを頼むという文化はありませんでした。それが、屋久島のエコツーリズムをはじめとして、そういう文化が徐々に浸透し始めたんです。ジオパークが立ち上がったのはそんな時代だったので、それをきっかけにガイドという需要がちょうど出てきた頃でした。僕たちがガイドを始めた頃は、ガイドのノウハウをどこかで学んだというわけではなく、自分たちのライフワークとか職業の中で、自分の足で稼いで積み上げてきたものを自分の中で噛み砕いて、自分の言葉にしてガイドに生かしていました。今は、ガイド養成講座などで学んだことを話しているから、そう言った意味でガイドの性質が変わってきていると感じます。時代が変わっても、自分の足で歩いて実感して、自らの言葉で伝えて初めて聞き手が面白いと感じるのではないかと思います。

これからの
ジオを
考える。

ここまでの活動では、とにかく走るばかりやってきたように思うので、これからはやってきたことを振り返って発信できるようになる必要があると思います。例えば、活動のひとつに研究者に補助金を出して調査・研究をしていることなどがありますが、そのことをアピールしていないので島民は知らないのではないかな。このように情報不足だと参加しづらいこともあるので、情報の共有はとても重要です。また、ジオパークを活用した教育プログラムも進んできたところですが、どうしても偏りがあるので、4つの島で動かしていくには、高校だけではなく、小学校や幼稚園も視野に入れるべきではないかなと思います。



4つの島で
動かしていく。

松浦道仁 (西ノ島ガイド | 焼火神社 宮司 | 西ノ島町観光協会 会長)



深谷 治(隠岐ジオパークガイド養成講座 講師 | NPO 法人 隠岐しぜんむら 理事長)

ジオの活動は、本来保全ありきです。

ガイドの仕事は本業ではありません。残念ながら、ガイド1本で食べていけるほどの需要はまだなくて、特に冬は観光客が来なくなるのでガイドの仕事がなくなってしまう。でも、「ジオパークの活動は本来保全ありき」というところに立ち返れば、保全活動を観光に結びつけるという発想が生まれます。今の世の中、環境に対する意識の高い人が増えていきますので、地元で行われている保全の取り組みをこれからは観光に結びつけるべきです。例えば、ガイドがやっているゴミ拾いなどの活動を観光に結びつけ、修学旅行生がゴミを拾う体験をする。このようなジオパークにしかできないジオパーク型観光(保全と観光の両立)は、観光客の社会貢献に対する満足度につながるし、企業のCSR活動にもフィットします。そうすると、冬場になかったガイドの需要が生まれます。推進機構が仕掛けて、ガイドが現場を仕切るといった役割分担ができるのではないかと思います。これからの推進機構は自分たちの役割をしっかりと担うことが大事だと思います。これは自分たちでやるべきこと、これは観光に任せること、のように役割分担をする中でガイドも協力していくような体制にできると良くなっていくと思います。

ガイドが担う、ジオパーク型観光。

コロナ禍を境に団体客が減って、個人客が増えてきました。ジオパークはガイドがいなければ魅力が伝わりにくいということを考えると、個人や少人数のグループの方が適していると思います。しかし長年島に住んでいると、地域の魅力が当たり前になり、お客様がどのような話を面白いと思うのかわからなくなってきてしまいます。そういう時は、移住者の目が自地域の魅力の再発見につながると思います。

また、インバウンドは、まさに個人・小グループの方が多いので、隠岐ジオパークに最適なお客様だと思います。一方、受け入れ体制は整ってきてはいるものの、島ならではの交通手段の確保の難しさや多様な食事への対応が課題と言えます。

隠岐の伝統、生活様式、自然環境は海外の方が訪れても満足していただける魅力があると実感しています。隠岐という離島環境の中で熟成された自然と人の共生関係は目で見るだけでは伝わりません。海外・国内関係なく隠岐を訪れた方々が、その関係性を発見・再確認し、感じられるような体験を提供できるガイドを目指しています。



福田貴之(隠岐ジオパークガイド | NPO 法人 隠岐しぜんむら)

ジオパークもインバウンドを。

COLUMN

共有がふるさとを育む



池田 高世偉

隠岐の島町長
隠岐ジオパーク推進機構 理事長

初めはジオパークのイロハもわからず、この景観が素晴らしいということしか知らなかったなか、地域の皆さんから生まれた組織が少しずつ発信して育み、地質や自然や文化といったもっと幅広い考え方で地域の魅力を発信できるということになってきました。そして、地域の人が力を寄せ合って世界ジオパーク認定を目指したわけです。2015年に空港の愛称を一般公募した時、一番多かったのが「世界ジオパーク」で、島内外で少しずつジオが認知されてきたことを実感しました。中でも、この隠岐の未来を作っていく世代、子供達の意識が変わってきたと思います。子供達は9割以上が一度島外へ出ますが、故郷へ帰りたいという思いを醸成できる手段の一つがジオだと感じています。教育の中で隠岐を知る。子供

を中心に根付いてきていますから、将来は強いなと思っています。

このように、ジオを知らなかったところから徐々にみんなでわかり合ってきて、教育も観光もこれから良くなると思います。けれども、地域の人にもう一回隠岐はそれだけすごいんだよ、と知ってもらい取り組みをしないとけないと思っています。例えば、公民館での地域学習やイベントをやることですね。隠岐4町村で同じ時間に海洋ゴミを収集するなど、自分たちにとって一番問題である海洋ゴミにみんなで取り組むというようなことを4町村で重ねていく。もう一度地元の人とやっていくとゆうことが大事です。隠岐の魅力をみんなで共有することでさらに会話が進み、その広がりの中でふるさととはまだまだ育まれる。そう思っています。



左から野邊みなもコーディネーター、石倉修校長、山中秀行教諭

島根県立隠岐高等学校

島後 | 隠岐の島町

隠岐諸島に4つある県立高校のひとつ。他に、島後の隠岐水産高校、隠岐養護学校、島前の隠岐島島前高等学校があり、それぞれ隠岐ジオパークを活用した探求学習を行なっています。

2015

2023

EXPANDING

発展。広がる仲間

2015年、世界ジオパークがユネスコの正式プログラムになり、少しずつ隠岐ジオパークの名が知られるようになりました。日本ジオパークの認定地域も全国に増加していきます。隠岐ジオパークでは地域との多様な連携が実を結び、世界ジオパークとしても他に例のない独自の取り組みの輪が広がっていききました。

- 2015 ユネスコ世界ジオパークとなる
- 2016 別府第2ターミナルに拠点施設を整備
- 2018 拠点施設 来居ターミナル オープン
- 2018 アジア太平洋地域ユネスコ国内委員会を招聘・研修会 開催
- 2020 一般社団法人化
- 2021 観光庁推進・観光地域づくり法人(DMO)登録
- 2021 拠点施設 隠岐ジオゲートウェイ オープン
- 2021 拠点施設 Entô オープン
- 2021 「国連海洋科学の10年」キックオフイベント 開催
- 2022 隠岐観光協会と合併し、隠岐ジオパーク推進機構を設立
- 2023 国際海洋ゴミシンポジウム 共催
- 2023 Entô・隠岐高校が日本ジオパークネットワーク表彰 受賞

ジオパークの名が広く知られるようになり、隠岐ジオパークの活動も広がりを見せ始める。学校教育の現場ではジオパークを活用した探究学習プログラムを開始。隠岐ジオパーク推進協議会は観光庁が推進する観光地域づくり法人に登録、新たな拠点づくりを進める。そして、保全と観光の二軸で展開するため隠岐観光協会と合併し、2022年、隠岐ジオパーク推進機構を発足。2023年には、ジオの取組事例が日本ジオパークネットワークで表彰、さらに第10回ユネスコ世界ジオパーク国際会議(モロッコ)でも取組事例が紹介されるなど、評価されている。



山中秀行(島根県立隠岐高等学校 教育研究部部長)

ジオ教育で、地域の課題に目をむける。

教育の成果は30年後に現れると一般的にいわれています。一方で、地域の課題は社会問題として解決していかないといけないので、30年後に地域で活躍しているだろう生徒たちには、地域にちゃんと目を向けて欲しいと思っています。そこで隠岐高校では、ジオパークを題材にした教育で、生徒たちの行動のベクトルを地域に向けています。しかし、ジオパークというと地質や地形だけでなく、文化財やそこで行われるお祭りといった人の営みはジオではないと考えられがちなので、ジオは特別なものではなく自分たちの生活につながっているものという実感を広めることをまずは大前提にしています。ジオを構成する人の営みが、実は自分の足元から生まれてくるんだということに気がつく、地域の素晴らしさがより感じられると思います。

ジオパークを
活用した教育で、
人をつくる。



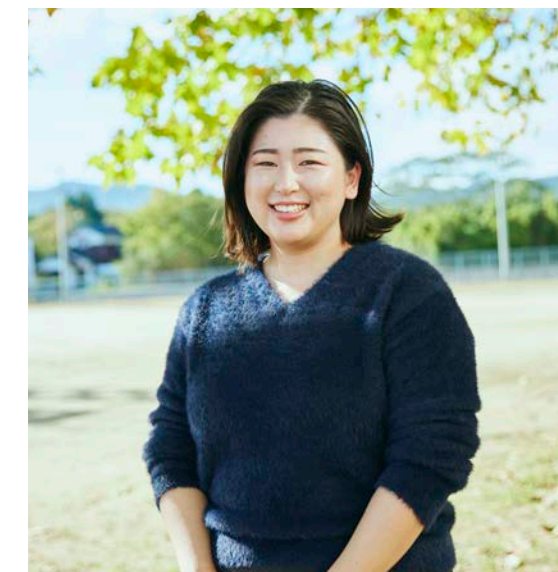
石倉修(島根県立隠岐高等学校 校長)

卒業したら終わり、じゃない。

隠岐高校では2023年から「みらいハイスクール構想」という社会に開かれた新しい学びの形に参画しています。例えば、1週間だけ他県の高校に留学することなどを行っていて、他県の高校生の留学も受け入れています。島外の生徒に隠岐ジオパークの良さを知ってもらいたいというのがありますが、それよりも彼らが地元に戻った時に、自分の地域にもベクトルを変えれば素晴らしいものが見つかるんだというような意識の変革を目指しています。知らない場所へ学びに出ることで、新たなつながりができて化学変化が起きる。学びの場所を学校外にも広げることです。また、高校での活動で培ったネットワークを切らない取組みとして、卒業生ワークショップを2か月に1度実施しています。隠岐に帰ってきた子たちが集まって、自分たちがどんなことをしていきたいか、現役の高校生にも関わってもらいながら考えていきます。高校を卒業してお終いではなく、むしろその後の人生についても一緒にやっていこうとしています。

子どもたちの変化と、地域への波及。

ジオパークを教育に活用する取組みは、隠岐高校では2012年度から始まりました。当初はジオ調べ学習のようなところで終わっていましたが、2015年度からは、ジオパークを活用しながら自分たちで何ができるか考えるというスタイルに変わっていききました。そういう視点でやっていくと、他の人ともつながれるし、電話でアポを取るなど、もう一歩進んだ社会経験が積めます。すると、真摯に話を聞いてくれる大人との出会いや、自分の違う一面を実感する体験、後輩のための交渉など、生徒それぞれの成長が行動で見られるようになりました。さらに、チーム毎にフィールドへどんどん出て行くため公共交通機関の利用率が增大し、地域のインフラへも良い影響が出ています。また、普段高校生がいきづらいう地区に毎週入れ替わりやってくることで地元住民からも喜ばれ、地域の活力の着火剤としての役割も果たしています。



野邊みなも(隠岐の島町教育委員会 高校魅力化コーディネーター)

ジオを教材に、
自分たちを知る。



左から：大賀学(島根県立隠岐島前高等学校 主幹教諭)、野津 孝明(同校長)

島前高校では、もともとこの地域の自然や文化を教材として扱った授業を行っていた中で、2022年度から隠岐ジオパーク推進機構からの講師派遣などで連携が進み、より専門的な内容について取り扱えるようになりました。教員というのは数年で転動していきますが、扱いたい内容というのは普遍的にあるわけで、そこで地域の人材を活用することによって、持続的に行えるというメリットがあります。

また、環境や状況が許せば、教員以外の外部の専門家を交えて授業作りをしたり、この地域の学びだけにとどまらず、推進機構には世界のジオ地域とつながっているという強みがあると思うので、同じような課題や興味に関して、世界の子供達と協働的にいろいろなプロジェクトを進めていくことができたらいいなと思います。観光資源としての魅力を掘り起こし、もっともっと外の人に隠岐に来ていただく、知っていただくというのを、推進機構と地域の方と、島前高校の生徒とでずっと探り続けていけるといいなと思います。学習のコンテンツとしてジオパークを活用することは非常に魅力的。必要な部分についてはしっかりと連携を図っていきたいです。

ダイナミックな大地の成り立ちとか、独特な自然とか、人の営みというのは、何をやるにしても関わってくる。いろいろな人のやりたいことを、推進機構のスタッフを中心として、コーディネートできるような人材が現れてくると点と点が線や面につながるんじゃないかなと思います。まだ今は点と点で模索している状態かなと思います。

また、島後地域と島前地域の取り組みや熱量に多少の違いを感じています。色々な計画や目標がどうしても島後を中心に据えたものになっている気がしています。スタッフの数の違いだったり、物理的に島が分かれているので、連携したくてもできない実態というのがあると思うのですが、これがウェブや仮想じゃなくて本当にリアルに連携するにはどうしたらいいんだろうというのはずっと課題として残るかもしれません。けれど、物理的にどうしようもない距離感があるものの、隠岐は文化圏としては一つなので、その独自性を打ち出せる強みはあると思います。人の営みは自然の恩恵に影響を受ける部分が多いですから、地元の人が地元を深く見つめ直す、自分たちのルーツや特徴を知るといった意味では、ジオは非常に良い教材です。先人たちの営みの延長線の最先端として今の自分があるわけですから。

COLUMN

島を越えてつなぐ・広がる

WAIRA ACT

隠岐の高校生による
地域プロジェクトサークル



隠岐ジオパーク内には4つの有人島があって、県立高校も4校ありますが、同じ地域内にありながら、島を越えての交流はほとんどありませんでした。そこで生まれたのがWAIRA ACT (ワイラ=私たち、アクト=行動する)です。初めは交流が目的でしたが、そのうち一緒に活動もやろうということになりました。みんな別々の島で暮らしているので、オンラインミーティングも活用しながら、島後の隠岐ジオゲートウェイを拠点に活動しています。現在メンバーは8名で、島留学で

来ている島外出身の生徒も多くいます。隠岐高校の授業では、隠岐ジオパークを題材にした探求学習を行っていて、私たちは隠岐4島のつながりをもっと深めて、たくさんの人に隠岐の特殊性を知ってもらいたいと考えています。2023年は、西ノ島町で行われた筑波大学のニホンアシカ発掘調査のお手伝いをしたり、2050年の隠岐の未来像をジオラマで表現するワークショップ「ユメジマ」を開催したりしました。未来の隠岐をどうしたいか、地域の方々にたくさんの夢を考

えてもらいました。WAIRA ACTの活動を通じて地域の大人のひとと話す機会があり、興味の幅が広がって、行動力や会話力もつきました。自分たちで考える力や失敗を恐れなくてチャレンジしていく力を身につけたプロジェクトサークルに成長できれば、外の人に隠岐を知ってもらえて、もっともっと隠岐を盛り上げることができると思います。地元や日本はもちろん、世界からも応援されるサークルを目指します！



左から：佐藤陽亮(島根県立隠岐水産高等学校)、松村武史(島根県立隠岐島前高等学校)、川口 隼(島根県立隠岐高等学校)

Entō は
ジオツーリズムの、
代表的な場所でありたい。



青山敦士(株式会社 海士 代表取締役 /CEO)

ジオパークを中心に据えた Entō

2017年、鳥根県と隠岐4島での協議から隠岐ユネスコ世界ジオパークに関する施策を各島で強化していく方針が決まりました。島後だとゲートウェイ、西ノ島と知夫里島では港に展示スペースができて、海士町としてはジオパークをメインにした複合施設に可能性があると議論が始まったのが最初です。インバウンドを始めとした高単価層にアプローチしていこうというはっきりとした狙いが町にはありましたが、観光地でもない場所にラグジュアリーホテルがあっても需要があるのかという議論から、いわゆる一般的なラグジュアリーホテルではないものが必要になり、ホテルとは名乗らずにジオパークの拠点施設に泊まれるという方向に舵を切りました。この発想の転換を含め、検討期間に6年を費やし、ジオパークをブランディングのど真ん中に持ってこようと思ったのは、グランドオープン半年前でした。

ジオパークを中心に据えたのは、海士町だけの独自性を強化しても、隠岐の色々な島に来るゲストにとってはチグハグな滞在経験になるという意識が強かったからです。隠岐4島が一つの旗に向かえる言葉は僕にとってはジオパークでした。だからここを生かさな手はないだろうと。また、コロナ禍においてホテルや観光業の役割、ゲストが求めているもの、地域が観光業に求めているものもより問われるようになったと感じていて、単純に楽しかったとか儲かったとかそういう次元ではないものを旅や観光に求められている、それはジオパークが大事にしている理念とぴったり合っていると感じました。

今、世界ジオパークネットワークの中で隠岐の取り組みは注目を集め、ここで生まれる事例が世界に波及していく可能性、新しいツーリズムの形を隠岐が世界のモデルとして作れるのではないかと手応えを感じています。しかしその一方で、Entōがジオツーリズムの代表的な場

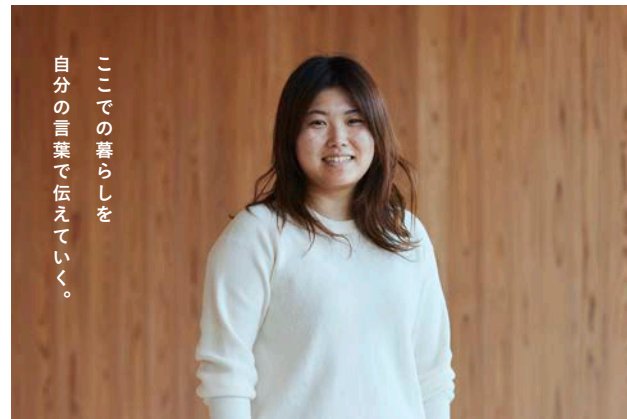
所でありたいと心から願っているものの、それが本当の意味で体現できているのかという点においては、まだまだ勉強不足で課題もたくさんあります。また、局所的な連携は実現していますが、地域の皆さんからするとまだまだとっつきにくいという印象が大きいと思うので、本当の意味で地域と混ざることができたらいいなと思っています。その連携はまだ途上です。スタッフ一人一人が島民としてどれだけ地域のコミュニティにしっかり根ざしているかということの延長上に、いろいろな会話だったり企画みたいなものが生まれてくると考えています。

ジオパークは最大のブランド

ガイドと呼ばない人たち、つまり私も含めた住民のジオパークへの関心や知識が総合的に上がることが大事です。現状、「ジオパーク」というカタカナ5文字に対する興味関心は人それぞれバラバラだと思いますが、ジオパークが指している領域において、この土地の人たちのこの土地への想いや関心は本当に強いと思います。土地への愛着だったり関心だったり表現できれば十分、その総称がジオパークっていうことでしかないのです。自分たちが誇りに思っている大好きな土地と未来に残したい文化、未来に何を残していきたいのか、意思を活動の中にどうこめるかということが大事だと思います。

世界ジオパークネットワークの、自分たちの国のここがこんなに素晴らしいんだというグッドプラクティス(優れた取組み)を持ち合おうという文化に触れて、このネットワークは本当に素晴らしいと心から思います。隠岐は本当に世界に一つだし、ある国のある地方はというとそれも世界にひとつだし、それをちゃんと認め合えて、そしてその違いがあるからこそ、より自分の国を誇りに思えるということは社会にとって大変大きいと感じます。そういう意味でジオパークは最大のブランドなのです。

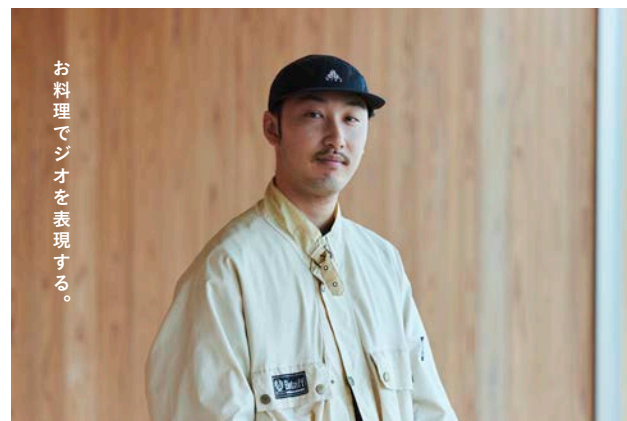
Entōのスタッフとして。



白水ゆみこ(宿泊事業部)

「ここでの暮らしを
自分の言葉で伝えていく。」

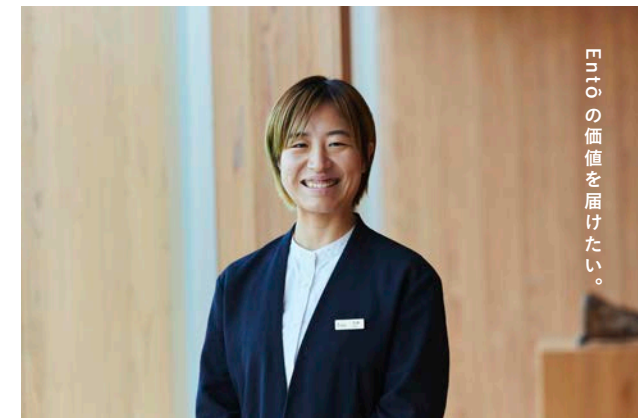
商品開発や広報PR、たまにフロントスタッフとして滞在中のお客様のサポートをしています。私は元々ホテルが好きで経営したいと思っていたのですが、実際にラグジュアリーホテルで働いてみて、どこかその土地に根ざしていなかったり、地域と分断されていたり、泊まってもホテル内だけでの滞在で終わってしまうような、その土地にあるのにないような感じがして、自分が思い描いていた理想のホテルの在り方とは違うなと思う経験がありました。でもここはジオパークの拠点施設であることから、大地の成り立ち、独自の生態系、人の営み全てを包括したジオパークというコンセプトを通して土地の魅力を発信でき、訪れる人にとって旅先の土地にどっぷり浸かるような、そういった宿泊体験が作れます。地域にとって、またゲストにとってもホテルにはそういう価値があるということをEntōを通して伝えられるのではないかと考えています。まずはEntōを知ってもらうことが隠岐に行くきっかけになると思うので、その裾野を広げていきたいなと思います。一度来るだけではわからないところもたくさんあります。来てくださる方々とつながりを持ちながら、Entōの価値、そして隠岐の魅力を国内外に届けたいです。



藤井晴明(ダイニングスタッフ)

「お料理でジオを表現する。」

宿泊に係るチームや現場のマネージャーのサポートを主に担当しています。その他に、Entōの公式ホームページのJornalコンテンツでコラムを書くことをはじめました。言葉や接客など表現の部分で、島での暮らしやEntōの魅力、自分たちの会社の動きなどをお客様にお伝えする業務に関わるなかで、隠岐ジオパークにおいては、長い年月を経て色こく残っている文化が今の暮らしや観光の土台だと考えています。自分がしっかりと島での暮らしを味わうこと、近所の子どもたちと遊ぶことや、地域と関わること、訪れる人々と目を合わせて話すことで、暮らしをちゃんと言葉に落とし込んで伝えていくことを継続していきたいです。Journalでは、ゲストの方に隠岐の旅を通じたインタビューを始めたところから、Entōに宿泊したり関わってくださった方が実際に感じたことを他の方にも伝えていく、いろいろな視点に触れることで旅って面白いよねっていうところを、読み物を媒介して旅をしたくなるようなきっかけを創れるといいなと思っています。そして、Entōを運営する人々がやりたいと思ったことに少し手を添えてゲストと共に旅をつくり、隠岐での思い出を贈ることができたらと考えています。



佐藤奈葉(マーケティング室)

Entōの価値を届けたい。

ゲストの夕食や朝食の仕込みから提供までを日々行なっています。ジオの勉強はしていますが、まだまだ表面的なところでしかジオを理解できていないので、受け取るゲストの方もどうしても表面的なところしか受け取れなくて、海が綺麗とか、景観だけに留まっています。ジオに対する感覚が高くてもっと知りたいという方ばかりがここに見えるわけではないので、僕らがジオっていうものをもっと考えて、料理の構成だったりメッセージ性みたいなものを組み立てないといけないと思っています。ジオをもっと伝えていくためには、お客様が家を出てからここに来て帰るまでの全部を理解して、どのタイミングでどういう感情になるのかと言ったところまで深く考えて料理を作る。そこまでしないとダメなのかなと思います。お客様の興味をもうちょっと深掘りできるようにしたいですし、Entōの価値を最大限に高めながら、もっと面白くしたい、面白いものを作りたいというのが、今の自分のやりたいことの答えなのかなという気がしています。



隠岐ジオパークの拠点担当として。



ヴォヴォシェン・ヤゴダ(一般社団法人 隠岐ジオパーク推進機構 マーケティンググループ)

ここはホテルの中のジオパークの拠点施設ですが、世界的にも稀でとても大事な場所なんですね。隠岐にとっても大事ですし、日本の他の地域も期待してくれて、海外からも注目を集めているところです。ここを目指すのは、ホテルのお客様だけでなく、島民の方にも積極的に利用してもらって、島民と旅行者の方が交流できる場所になることです。今後は、年間を通して何をするか、どのようなテーマで島民や来館者の方々に何を伝えたいか、何を感じていただいてどのような行動に移していただくか、という考え方のもとに色々なイベントや展示をやっていきます。また、島内の関係機関をもっと巻き込んでいきたいです。2023年は海士町の中央図書館の方が企画展に合わせた選書をしていただいたとか、隠岐桜風舎という海士町の「島の文化」の伝承に関わっている会社と一緒に企画展を開催するなど、少しずつEntōジオラウンジの連携の輪を広げてきています。そのように人が集まる場所として他のパートナーも探したいと考えています。

インバウンドについては今後増えてくるだろうと思います。今、海外の旅行会社との商談会で感じるのは、隠岐の圧倒的な自然と、真の田舎、ありのままの日本の風景

観光は、
平和を考えるための
ひとつの手段。

のウケがとても良いということ。しかし、他の日本の観光地と戦わないといけないので、どのようなテーマ性を持たせて、どのような客層に来ていただいているかを業務として考えており、推進機構としては、海外から来られる観光客の受け入れができるガイドの育成と活躍のサポートをしていきます。

この数年間は隠岐の売りになるものを探ってきたのですが、今はそれを発信するフェーズに入ってきています。今後はもっと隠岐に来たことで地球のことを考えられるような、保全のことを意識していただけるようなテーマ性を持ったツアー造成が必要だと感じています。そして、観光は経済的な利益だけをもたらす事業ではないことを忘れずに仕事をしていきたいと考えています。草の根のレベルで色々な国の人が交流することで、お互いを理解するといった、観光で平和を目指すこともできると思います。それは「平和のことを考える」というユネスコの理念にもある。観光は平和を考えるひとつの手段でもあるし、観光客に来てもらうことで隠岐をもっと豊かな土地にできる。その大事なパートナーのひとつがインバウンドに前向きなこのEntōなんですね。





赤壁 せきへき

島前 | 知夫村

知夫里島の西海岸沿いに、約1kmにわたって続く断崖絶壁。約600万年前に噴火した噴火口が、冬の季節風により荒波に侵食されてできた断面です。赤い色は溶岩の鉄成分が酸化して生じました。



隠岐全体で、
一定レベル以上の
サービスを行う。

ゴメス・ダヴィッド(隠岐ジオパークガイド | 知夫村集落支援員)

知夫里島は隠岐の中で一番小さい島で、宿もバスも団体客の対応ができないので、ツアーのルートから外されることが多いと感じています。対応ができないことをどうにかしないと仕方ないとは思いますが、隠岐ジオパークは四つの島でひとつのジオパークなので、各島の経済も回っていかないといけない。ジオを使ってみんなで隠岐を元気にしようと思ったのなら、真にみんなで動く必要があると思います。当然難しい部分もありますが、これから観光客が増えていくことを考えると、島ごとに戦うよりも島同士力を合わせて戦う必要があります。そこにどうやって向かうのかと言ったら、各島にお客様やチャンスが公平に降りてくる必要があると思うのです。

また、隠岐にはさまざまな団体がありますが、リスク管理やお客様の満足度が各施設で大きく異なります。どこかの島で不満が発生するとすべての島に影響がでますので、どの島でもファンが増やせるように、一定レベルのサービスの底上げときちんとした基礎が必要だと考えています。

四つの島で、ひとつのジオパーク。

もっともっと、
島同士の交流が
必要。

ジオパークに限らず、隠岐は全体的に島同士の交流が少ない印象です。島後の方は島前にあまり来られていない。そこはちょっと残念かなと思います。子供の時に、たとえば遠足の先を島後の子は島前に、島前の子は島後に行くなどして交流する必要があると思います。2022年に、各島の観光協会の間で他の島に行くということをやっていて、私は3日間海士に行きました。そういう交流が足りていないんじゃないでしょうか。歴史的に考えても、元々の関係が薄いので、ジオパークをきっかけにもっと厚くなればいい。交流すれば、お互いの島のことがもっと良くわかるし、真に4つの島で1つのジオパークになれる。4島がひとつになって動いているということをいろいろな場所に出せば、とても良いと思います。



竹川千里(隠岐ジオパークガイド | 知夫里島観光協会)



塩の浜海浜公園 しおのはまかいひんこうえん

鳥後 | 隠岐の島町

隠岐諸島最大の砂浜で、湾内は100m先まで遠浅です。湾外の海岸では、約550万年前の溶岩で作られた縞模様の「アルカリ流紋岩」が見られます。これは日本では珍しい大陸的な組成の岩石です。

現場から思うこと。

隠岐ジオパークガイド

鳥後 | 隠岐の島町

ジオパークを素材に地域おこしをするために、観光ガイド、教育支援、調査研究、保全・保護などを行う。



守本智子(隠岐ジオパークガイド)

観光、教育、調査研究、保全と現場の人材の重要性

隠岐が世界ジオパーク認定を受けたことは、隠岐の自然に国際的な価値があると認められたということです。ジオパークの取り組みでは、観光、教育、調査研究、保全保護の各分野での活動状況が評価されます。自然資源を観光や教育の分野で活用したり、現状を調査したり、それを保全するためには、現場の人材が継続的に活動を行っていくことが重要だと痛感します。ガイドという職業は、これまで隠岐になかった新しい職業で、ジオパークの取り組みは、職業選択の幅を広げていると言えます。また、世界ジオパーク認定を受けて1つ可能性が広がったのは、国内の国立公園やジオパークのガイドと仕事に関わる機会ができたことで、他地域の事例を知ったり、国内の第一線で活動する有識者やガイドが隠岐を訪れる機会も増え、隠岐のウワサが広がっている現実だと思います。今後、ガイド人材が増えれば、現場での活動量や対応量のキャパシティが増えるという意味で、アクティビティの幅が広がる可能性を感じます。



齋藤正幸(一般社団法人 隠岐ジオパークツアーデスク ガイド)

ジオ的な見方で、隠岐にハマる。

ジオパーク学習の講師として教育現場に関わる中で、たくさん子ども達に出会います。ジオ学習は自分たちが住む集落だけでなく他の集落やジオサイト、山や海へと現場に足を運び、自分たちが暮らす島を体験しながら学んでいきます。ジオパーク的な見方は、隠岐という土地についてもっと深く知り、自分の住む限られた世界から少しずつ視野を広げて地球というとてもスケールの大きい世界まで広げていくことができるため、島という閉鎖的な環境にいる子供たちにとって、世界の大きさや、世界の中の隠岐を知る、とてもいいツールだと思います。子供たちが体験した隠岐を、ご家庭でたくさん話してほしいなと思います。なかなかジオパークを知る機会が少ない大人の方々にも、改めて自分の暮らす土地や生活を違った視点で眺める機会になるといいと思います。ジオパークがもつ視点で眺めると、普段なにげなくある景色が、その背景に広がる膨大な時間がつないできたものの輪郭がはっきりと奥行きをもって見えてきます。そして、その時間の「今」にいるのが自分たちだと気づくと、自分たちもまたその風景の一部なんだと、もっと自分事になっていくのだと思います。子供たちには、広い視野で物事を捉えたり、目の前に見える事象の背後にある目に見えない別の景色の存在を意識する感覚を身に付けることにもとても役に立つと思います。初めて隠岐に来られたお客様はその豊かな自然に驚かれます。ですが、それで終わりじゃない。隠岐は一回行ったら終わりという場所ではないと思います。ジオパーク的な見方をすると何度来ても新しい発見があり、その発見がまた次の発見につながる、掘れば掘るほど島

の懐の深さ、魅力を感じる場所です。お客様が自らいろいろな発見をして、隠岐の魅力にハマって、リピーターになってもらえると嬉しいですし、隠岐に来たことで自分の地元でも今までと違った目線で面白さを発見してもらえると嬉しいです。そのためのお手伝いをガイドとしてできたらと思っています。



石川 樹(一般社団法人 隠岐ジオパークツアーデスク ガイド)

理解を深めるより、現場に出る。

ジオパークって何なの、とか、ジオパークになっても何も効果が無いじゃないかという声を聴く事がありましたが、恩恵はあります。ただそれを形にして皆さんの目の前に提示できるものばかりではないだけです。ジオパークというプログラムはその土地を知ったり、地域や地球のこの先を考える上でとてもいいものですが、島民全員が他の誰かに語れるほど精通するのは難しいと思います。ジオパークってこういう事によって小難しい話もたまには必要ですが、それよりも、島民や島に訪れた方たちと一緒に海でも山でも町でも出て遊びながら、物の見方や考え方を育んでもらったり、保全・保護などを自分事として受け止めてもらえるようになるといいなと思っています。ジオパークは単なる地域活性化プログラムではなく、人間性を高める事もできると考えています。ジオパーク活動を通して、いろいろな人たちが、自分だけでなく、自分たちの為に生活環境や地球環境をより良くしていこうって考えが広がったら最高ですね。

形ではなく心をつなぐ

忌部正孝
水若酢神社 宮司

私はこの10年でジオパークというのを知りました。そして隠岐の素晴らしさが認められたのはとても喜ばしいことだと思います。私は神社の宮司で人の心や生活の分野ですから、地質、自然、人の営みといったジオの構成資産の中では、営みというところで少し役割を果たしているかと思います。

この神社は水若酢命という神様ですけれども、おそらく崇神（すじん）天皇の御代に隠岐に派遣されて、島を開発しながら海上鎮護の役割を果たされたのではないかと考えられています。隠岐の島町には、式内社という非常に古い時代から社格が高いとされる神社が、水若酢神社を含めて7社あります。島前にも8社あって隠岐全体では15の式内社があり、そのうち名神大社が4社もあります。出雲には2社で石見にはないのに、なぜ隠岐に名神大社が多いのでしょうか。隠岐の島町の式内社は、南北の西側、つまり大陸に面した側に全て位置しています。それはやはり、神様に隠岐を、日本を守っていただくためなのではないでしょうか。また、島後には神社が全部で64社あり、これも多いですね。自然の中で生きてきた人間の、神様に対する感謝と崇敬の姿なんだと思います。

水若酢神社 みずわかすじんじや

島後 | 隠岐の島町

平安時代に編纂された日本最古の全国神社一覧『延喜式神名帳』の式内社に列せられた格式高い古社。境内には樹齢370年の老松群が鎮守の森を形成しています。



ジオパークの中で営みと言われる部分はほとんど伝統行事ですね。そして、伝統行事としてクローズアップされているものは祭りなんです。日本は農業国家で稲作文化です。一年間の行事が全て稲に関わってきている。農業は自然の力がとても大きいので、日本の神道というのは自然崇拝から始まり歴史と共に人間が神様として祀られるようになっていますが、根本は自然です。日本人は自然を崇拝して神と讃え、全てのものに息吹きがあると考えて自然に感謝し、今までこの営みを続けてきた先祖を崇拝する。それが日本の文化です。感謝をしながら自分たちの生活を繰り返して、それをまた先祖からずっと受け継いできた。それが営みなんです。

人の営みとして、牛つきや相撲、お祭りなどの伝統行事を取り

上げていますが、形ばかり見て本来の「つないできた心」が薄れつつあるのではないのでしょうか。形は時代が変われば必ず崩れますが、そこに息づく心、思い、感謝、志、そういうものを切っけはできません。昔からのものをしっかり守るというのはとても難しいものですが、そこに感謝をする心を子どもの頃から育まなければいけないでしょう。

ジオパークの活動も恩恵を受けている部分がものすごく大きいと思います。しかしそれは先祖が作った財産をもらっているだけの話。それをしっかり受け継いで次の時代に渡さないといけない。それを継続していこうと思うならば、本質を大事に考えて勉強して、その上でそれがどうあるべきかをしっかりと考えていく。観光や地域活性にのめり込むあまり、それをしっかり守っていかな

かったら、今まで先祖がつないできたものは無くなってしまいます。祭りだって脚光を浴びるものだけではなくて、64ある地域のお宮さんがあって行事をしながら守っている。そういう小さいものがジオパークにつながっていく元だだと思いますので、それを大切にしないといけない。

長い歴史の中で私たちが生きているのはほんの点にすぎないんですね。その時代の人々の点がずーっと連なって歴史が出来上がっている。自分もちゃんと歴史の中の一つ。みんなで今この歴史を作っているんです。そういう気持ちでやっていきましょう。一人の人間の時間なんてほんのわずかです。いかに同じ志を持つ仲間を増やせるのが大事です。

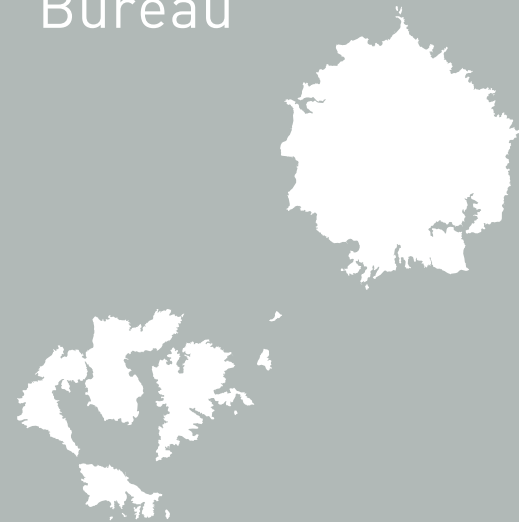
隠岐全体が豊かになる
未来を目指して。

2022年4月1日、(一社)隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会と隠岐観光協会が合併し、観光地域づくり法人「(一社)隠岐ジオパーク推進機構」を設立しました。4島広域組織が合併したことで、ジオパークを基盤とした観光振興を推進するとともに、より効率的な組織運営を行います。

隠岐全体としてジオツーリズムや環境保全を行い、観光客には旅で何を気がついて欲しいのかといったことも踏まえてツアーを開発していきます。また、10月以降に観光客が激減するという大きな課題に対して、観光だけでなく研究のフィールドとしてもジオパークを使っていくことを目指します。



Oki Islands Geopark Management Bureau



About us

隠岐ジオパーク推進機構のこと

隠岐諸島の海や陸の自然の豊かさを次世代へ繋いでいくために、地域みんなで自然を守り、経済的にも豊かな社会を目指して活動しています。

Vision

目標

住民が地質多様性、生物多様性、文化多様性の価値を理解し、継承する、経済的にも豊かな隠岐

Mission

目標実現のための行動

教育や保全、ツーリズムを通じて、持続可能な地域の発展に向けて住民が一丸となって取り組み、ひいては地球全体の持続可能な発展に貢献する

Concept

基本構想 2022

隠岐諸島の海や陸の自然の豊かさを元気なまま次世代へつないでいくには、隠岐の資源を守りながら活用することが重要です。その持続可能な発展の実現のために、目標を3つ掲げています。

目標①

多くの方に隠岐諸島に来てもらうこと

宿泊者数

9万5千人泊を目指す

目標②

また来たいと思ってもらうこと

満足度及び再来訪意向

80%を目指す

目標③

自分たちが隠岐を守り伝えること

島民の関心度

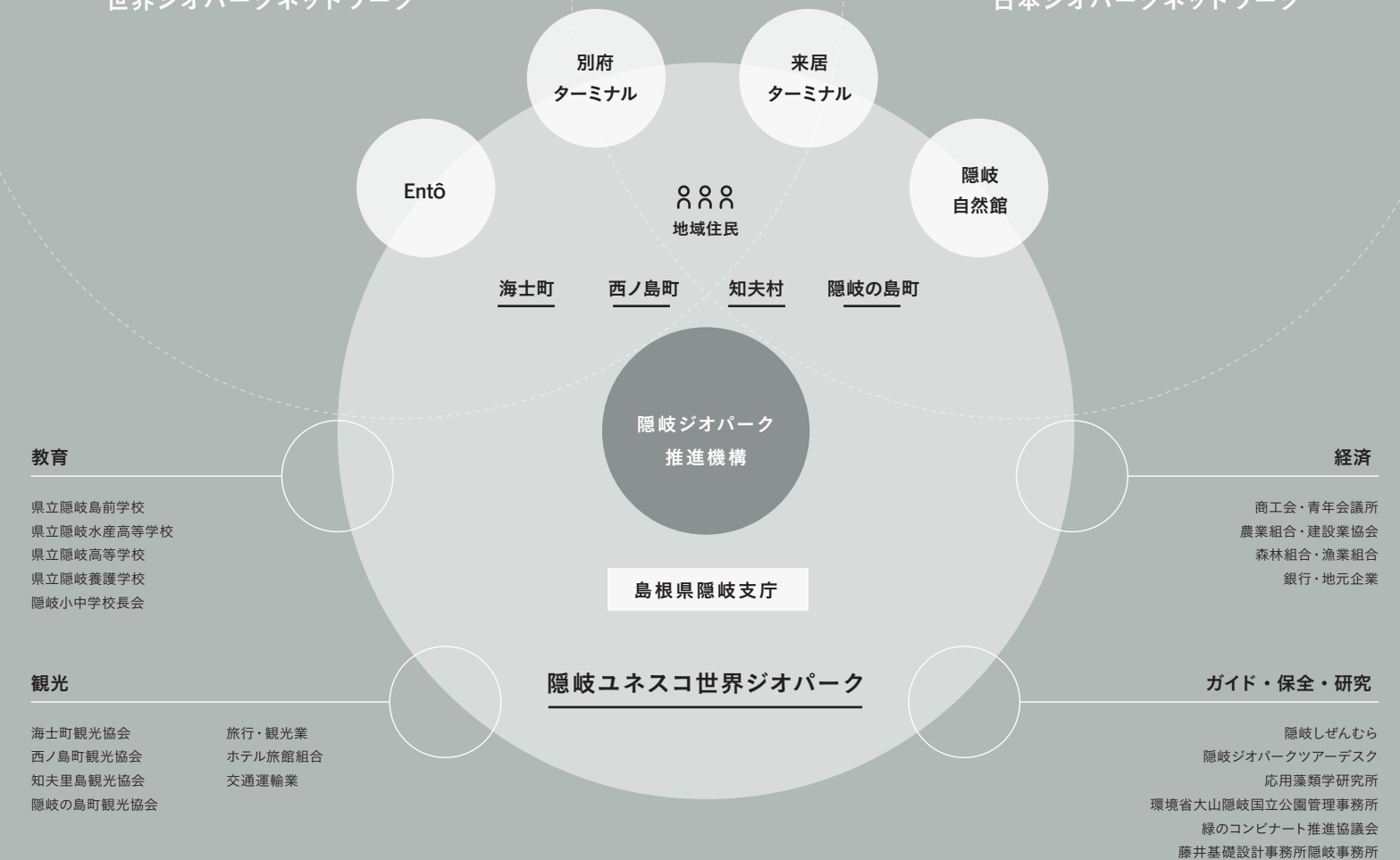
80%を目指す

実現のための取り組み

- ・ ジオツーリズムの推進
- ・ ガイド養成
- ・ ジオサイトの施設整備
- ・ 体験プログラムの充実
- ・ 宿・食・土産の充実
- ・ 地元素材の活用
- ・ 地元での製造・販売・消費
- ・ 活動拠点となる施設の整備と活用
- ・ 自然の保全保護活動の充実
- ・ 調査研究活動の充実
- ・ 隠岐に誇りと愛情を持つ子どもたちを育てる
- ・ 学校教育との連携強化
- ・ 社会教育との連携強化

世界ジオパークネットワーク

日本ジオパークネットワーク



だれもが主役。

四つの島で

ひとつの隠岐ジオパーク。

西ノ島 | 西ノ島町

島前の中でも北西に位置する西ノ島町では断崖絶壁が生み出す絶景が広がり、訪れる人々を魅了しています。また、航海安全の神様として信仰されている焼火神社は、江戸時代の観光地として広く知られていました。後醍醐天皇が配流された土地とも伝えられる歴史ある島です。

中ノ島 | 海士町

商業的な稲作が行われている島前唯一の広い平野をもち、湧水にも恵まれている海士町。古くから稲作が行われ、豊かな島として知られており、そのため、後鳥羽上皇の遠流の地に選ばれたと考えられています。人の交流が盛んな風土で育まれた海士町のチャレンジ精神は島の発展の原動力になっています。

島後 | 隠岐の島町

空港のある隠岐の島町は、隠岐の玄関口の役目を担っています。そんな隠岐の島町はかつて、火山活動で生まれた上質な黒曜石の産地として日本列島の人びとを強く惹きつけていました。火山活動がもたらした交流は、江戸時代の北前船の賑わい、現在の隠岐の島町の人の営みに連綿とつながっています。

知夫里島 | 知夫村

雄大な景色とともに、小さな島だからこそ古来伝承されてきた独自の文化が守られてきました。太古の噴火の様子を今に伝える「赤壁」や、12世紀頃から行われてきたと思われる先人の知恵「牧畑」など、地球や人の営みを身近に感じられる島です。

COLUMN

ジオパークは、人が作り上げるもの。

ジオパークは地質、自然、文化それぞれの資源を活用して、地域全体で盛り上げていくという仕組みです。そこに住んでいる人たちが作り上げるものですから、仕組みの中にどれだけ多くの地域住民を巻き込むかめかがポイントになります。隠岐の場合は自治体が直接関与せず、民間主導で動いていて自分たちで作り上げているという点で、日本を先導するジオパークだと思います。

これからの観光のあり方は、ジオパークを活用したサステナブルツーリズムを観光客と一緒に作り上げるようなことを、小さい規模で行うことだと思います。コロナ禍でマスツーリズムは破綻しましたが、小さなツアーは地道にやられていましたので、そうした形にすり替わっていくでしょう。一人当たりの消費単価をいかに上げて地元で落としていくかが重要です。ジオパークと観光というのは、これからもっと密接になっていくと思います。

日本では国立公園はあまり意識されませんが欧米では人気があって、生物だけでなく地形・地質の解説員が必ずいます。日本の場合は単に風光明媚な観光地として捉えるた

め、地形や地質がどうやってできたかということはほとんど語られません。非常に勿体ないことです。ジオパークでは、ガイドがその地域の良さを、地域に住んでいる人の目線で、自分たちの生活と密着させて語ることで、自分たちの生活と密着させて語るので、来た人は地質や自然だけではなくその地域の風土や文化も学べるわけです。これがジオパークの良さです。

ジオパークを熱意を持って継続していくのは大変難しいことですが、コロナ禍を経て観光のスタイルも変わり、ジオパークがやりやすい時代にきていると思います。東京、浅草、京都、奈良より日本の田舎に行きたいというインバウンド需要の流れができつつあり、それに加えてユネスコの冠は海外の観光客には魅力ですから、ジオパークで受け入れ体制を整えていくことがこれから要求されるでしょう。この機運を逃さず、どううまく動き、仕掛けていくかが重要です。

そしてやはりジオパークで大事なのは人です。熱意のある人が地域の人をいかに多く巻きこんで引っ張って作っていかれるかだと思います。



中田 節也

日本ジオパーク委員会 委員長 | 東京大学名誉教授
国立研究開発法人 防災科学技術研究所 参事


1952年富山県生まれ。九州大学理学部助手、東京大学地震研究所教授、防災科学技術研究所火山推進センター長を歴任。専門は火山地質学。JICA派遣専門家としてボリビア国サンアンドレス大学鉱床学研究所へ赴任、文部省の在外研究員として合衆国地質調査所 (USGS) メンロパークで研究、雲仙岳災害記念館の責任監修。

20 years

隠岐の未来に向けて、取り組みつづける




環境保全・保護




海岸清掃や外来種の駆除など、これまで個別に実施してきた取り組みが、ジオパークの活動を通じて隠岐全体として取り組むようになってきました。今後は更に保全・保護活動を推進し、国内外に展開していきます。

ガイドの養成




「隠岐の魅力を伝えられるのは人である」という考えのもと、ガイド養成に取り組んできました。ガイドを生業にできるよう、さらに質の高いガイド育成に取り組む、ガイド体験数10,800人を目指します。

パンフレット・映像制作




島内外のより多くの方に隠岐の魅力を伝えるために、パンフレットや映像を制作し、学校教育や誘客促進に活用してきました。誰にどの制作物をもって伝えるのかを整理し、より効果的な情報発信に取り組みます。

交流人口の拡大



観光客だけではなく、隠岐との交流事業を通じて、交流人口の拡大に取り組んできました。隠岐と関わりを持ち、隠岐の地域振興をサポートしてくださる関係人口の拡大にも取り組み、滞在人数・年間95,000人泊、観光客数・年間47,500人を目指します。

関連商品の開発




隠岐の事業者による隠岐ならではのお土産品の開発を目指し、新商品開発事業、パッケージ助成事業、認定商品制度に取り組んできました。販売促進への成果も得られ、隠岐の資源を活用した魅力発信にもつなげていきます。

イベントの開催




隠岐の人々に隠岐の価値を知っていただくために、講演会やシンポジウムなどを開催し、隠岐の魅力やジオパークの楽しさに関心を持っていただけるようになってきました。さらに、フィールドワークによる魅力発見を進めていきます。

防災対策への取り組み



コロナ禍において、蔓延防止のためのマニュアル作成と研修会の開催などに取り組んできました。今後、安心・安全な旅の提供に向けて、豪雨災害、津波災害への対策にも取り組みます。

パネル・看板の設置



来島者が隠岐を効率よく周遊し、隠岐の魅力やジオパークの楽しさを知っていただくためのさまざまな看板整備やパネルの作成を行ってきました。隠岐から日本、さらには地球の重要性も伝えていきます。

学校教育との連携




隠岐に生まれ育ったことへの誇りと愛情を醸成し、隠岐を伝える人づくりを目的として、ジオパークを活用した保育所から高校までの教育プログラムの構築、教材作成に取り組んできました。隠岐に対する関心度、中学生70%、高校生60%を目指します。

満足度の向上




隠岐のファンづくりのために、隠岐の旅や隠岐との関わりにおいて、満足度の向上に取り組む、80%以上の方に高い評価をいただくまでになりました。この高い評価を、交流人口及び関係人口の拡大につなげていきます。

体験ツアーの造成



これまでの体験メニューに加え、トレッキング、シーカヤック、E-Bikeなどによる体験メニューの造成に取り組み、内容、種類とも充実してきました。今後は環境保全を意識した「隠岐ツーリズム」の構築に取り組めます。

調査・研究の促進



隠岐の歴史文化や地質を主体とした調査研究が、多くの研究者によって深められてきました。当機構においても、論文募集及び研究助成事業などによってその支援を行ない、隠岐に関する論文の公表数・年間10本を目指します。

未来は、
この島の多様性から
生まれる。

島根県の北、日本海に浮かぶ隠岐。

4つの有人島と、いくつもの群島からできている。

そこにあるのは、圧倒的で繊細な自然。

日本の、世界の、地球の歴史。

島それぞれで、大切に受け継がれる独特の文化。

それは、世界をリードする普遍的で多様な営み。

隠岐をめぐるひとつひとつが、

地球の未来へつながっている。

